



棚田と山に囲まれたモーハイ村でホームステイし、大家族の手厚いもてなしを受けた。英語も日本語も通じないが、「身ぶり手ぶりで、何とかコミュニケーションとれたよ」と話す西さん(右から3人目)と埼玉県久喜市立久喜中学校の内田十誌哉さん(右から2人目)

# 世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



## 第9回

# 教師も現場で考えた!

## 教師海外研修 in ベトナム(前編)

JICAが国際理解教育・開発教育に関心のある教員を対象に実施する教師海外研修。開発途上国の現状や日本とのつながりを、教員自身が見て、感じて、考え、帰国後、その経験を日本の教育現場に還元することが目的だ。今回は、千葉、埼玉、山梨県の教員が参加したベトナム研修の様子を、2号にわたって紹介する。

### 輝く笑顔に魅せられて

「何ていい顔で笑うんだろ?」  
2007年8月、ベトナムを訪れた日本の教員たちは、子どもたちの屈託のない笑顔に魅せられ、本当の豊かさや幸せとは何かを考えさせられていた。



ベトナム日本人材協力センターで学ぶ学生との交流会で、茶道を教えた山梨県立韮崎高校の小林万里子さん(左)。教員たちは事前に話し合っただけで役割を分担し、折り紙や漫画、俳句といった日本の文化を紹介した

中・高校教員14人が参加したベトナム教師海外研修は、10日間、南北を縦断し、同国の社会や文化、日本とのかわりなどについて知る、いわば教員向けの課外授業だ。研修を企画したJICAベトナム事務所の鈴木和信さんは、「ベトナムは今、順調な経済成長を続けているが、華々しい面

だけでなく、その影にある貧困や格差の実体を知ってほしい」と話す。そのため、研修では「成長とそれに伴う課題」というテーマが設けられ、北・中・南部の都市と農村、病院や学校などを訪ね、地域間に広がる格差の現実を見つめた。

例えば、首都ハノイでは経済成長を支える人材を育成するベトナム日本人材協力センターや、比較的裕福な家庭の子どもたちが芸術・スポーツを学ぶチルドレンズパレスを訪問。他方、ハノイから約80キロ離れた少数民族の村で昔ながらの素朴な生活を体験したり、別の村では国際NGOが支援する中学校の生徒や教員と交流した。また、中部のフエでは、貧しい水上生活者の様子と彼らの生計向上を支える青年海外協力隊の活動を視察した。

チルドレンズパレスの子どもたちに「大切なもの」を尋ねる埼玉県さいたま市立高砂小学校の大橋みぎはさん(右)。事前に調べた日本の生徒たちの「大切なもの」と比べ、ベトナムでは「勉強」と答える子どもが多数いたが、両国とも一番多かったのは「家族」だ



積極的に発言する子どもたちと話し、都市部で暮らす親子の教育に対する意識の高さを感じた。でもその隣には、家計を助けるため、学校へ行くかずにわずかなお金を稼ぐ子どももいる。格差を目の当たりにし、複雑な思いだ。埼玉県北本市立栄小学校の坂口修さんはそう語る。同時に「子どもたちの明るい表情が忘れられない。前向きに生きる彼らの姿に感銘を受けた」と言う。



ごみ問題が深刻化するハノイでJICAの「循環型社会形成に向けてのハノイ市3Rイニシアティブ活性化プロジェクト」を視察する教員たち。ナショナルスタッフのトウイさん(左)を介して、ボランティアとしてプロジェクトに参加している住民に話を聞いた

不満を口にする日本の子どもたちのことを思った。「幸せはモノの豊かさでは測れない。人間の本当の幸せって何だろう?」そんな疑問が頭から離れなくなつた西さんは、日本の生徒にベトナムの子どもたちのことを伝え、幸せについて考える授業をしようとした。

### 教員自身が見て、感じる大切さ

長年、開発教育に取り組み、研修のファシリテーターとして参加した神奈川県横浜市立菅生中学校の松本みどりさんは、「日本の子どもたちに世界の現実を伝えるには、教員が

自ら学び、感じ取り、行動する姿勢が大切」と話す。そのきっかけになるこの研修は、単なる視察旅行とは異なり、教員がより深くベトナムを理解できるよう、行く先々で現地の人々と一緒に交流する機会が多く設けられている。それは、協力隊や専門家など現地の人とともに活動する人材を持つJICAならではのネットワークが成せる技。

研修に参加するまで、「実は日本の途上国支援に疑問を持っていた」という教員もいたが、水上生活者を支援する隊員や彼女を慕う住民、また、国立病院を訪れた際に出会った医師や患者などの苦労話を直接聞き、厳しい境遇に置かれた人々に対する支援の必要性を認識した。

また、研修に同行したJICAベトナム事務所のナショナルスタッフ、チン・トック・タイン・トウイさんが、ベトナム語、日本語の語学力

を生かして、教員と現地の人が積極的に交流できるよう配慮したことも教員のベトナム理解を深めるのに一役買った。「ベトナムの経済発展に貢献したい」との熱い思いを持ってJICAで働く彼女と話しながら、「ベトナム人から見たベトナム」の視点をとらえた教員もいた。

途上国をただ見るだけでなく、現地の人々やベトナムを支援する日本人と触れ合い、心を通わせることで気付けるものがある。そうして教員自身が見て、聞いて、感じた経験は、帰国後、教育現場でどのように生かされ、日本の子どもたちの心にどう届くのだろうか。(2月号に続く)

### JICAの教師海外研修とは?

教師海外研修とは、国際理解教育・開発教育に関心のある教員などを対象に、約10日間、途上国の社会・教育事情や日本の国際協力活動を視察するプログラム。高校教員は1967年から、中学校は96年、小学校は2002年から開始され、全国にある16のJICA国内機関が実施している。派遣先はアジア、アフリカ、中南米など約20カ国にわたり、帰国後、参加者は研修で得た経験をもとに、それぞれの教育現場で国際理解教育・開発教育に関する授業を行い、その結果を報告書にまとめる。昨年度までの報告書はJICA国内機関ホームページで公開されている。問い合わせは最寄りのJICA国内機関 (<http://www.jica.go.jp/worldmap> 参照) へ。